

## &lt;ホットトピックス (3)-4 &gt;

## アルツハイマー病：遺伝学的・環境的リスク因子に関する実験的検証の現況

岩坪 威<sup>1)</sup> 橋本 唯史<sup>1)</sup> 若林 朋子<sup>1)</sup> 富田 泰輔<sup>2)</sup> 諸橋 雄一<sup>2)</sup>

(臨床神経 2013;53:956)

アルツハイマー病 (AD) のもっとも強い危険因子は加齢である。AD の危険因子として遺伝学的に強い根拠を有するものには、アミロイド  $\beta$  ( $A\beta$ ), apoE $\epsilon$ 4 アレルなどがあるが、これらが AD のリスクを高めるメカニズムは必ずしも明らかでない。最近の GWAS スタディにより、CALM, BIN-1 などのリスク SNP が明らかにされ、その促進/防御効果の本態に関心が寄せられている。一方環境因子として、生活習慣病

の関与、とくに糖尿病・メタボリック症候群が注目されているが、その分子機序は未だ確立されていない。さらに最近、神経活動と  $A\beta$  の関係にも注目が集まっている。本講演では、演者らが試みているこれらの内因・外因性リスク因子の効果に関する実験病理学的検証の現状の一端を報告し、AD の発症機序について再考したい。

## Abstract

## Alzheimer disease: experimental approaches to genetic and environmental risk factors

Takeshi Iwatsubo, M.D.,<sup>1)</sup> Tadafumi Hashimoto, Ph.D.,<sup>1)</sup> Tomoko Wakabayashi, Ph.D.,<sup>1)</sup>  
Taisuke Tomita, Ph.D.,<sup>2)</sup> and Yuichi Morohashi, Ph.D.<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>Department of Neuropathology, School of Medicine, The University of Tokyo

<sup>2)</sup>Department of Neuropathology and Neuroscience, School of Pharmaceutical Sciences, The University of Tokyo

(Clin Neurol 2013;53:956)

<sup>1)</sup> 東京大学大学院医学系研究科神経病理学分野 [〒 113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1]

<sup>2)</sup> 東京大学大学院薬学系研究科臨床薬学

(受付日：2013年5月31日)